異世界姫と七人の小人

びお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界姫と七人の小人

【Ｎコード】
Ｎ９２０３Ｓ

【作者名】
びお

【あらすじ】
昔、昔１人の魔女がいました。どうにかこうにか王と結婚し、妃となることができました。しかし、魔女は一つだけ、王に隠していたことがありました。それは・・・『７人の子供がいる』こと。７人を育てるために異世界から１人の女の子を召喚するが！？

魔女の事情

昔、昔あるところに1人の魔女がいました。魔女はこの国の王に惚れてしまい、正体を隠し城につかえていました。真面目な性格もあり、王と王妃の信頼を得て充実した日々を送っていました。しかし、王に対する恋心は決して消すことはできませんでした。そうして恋心を隠し、侍女として過ごす魔女にもチャンスが巡ってきたのです。王妃が出産の際に息を引き取ってしまったのでした。そして、本来なら「白雪」と名付けられるはずだった子供も助かりませんでした。しかし魔女が何かをしたというわけではありません。それがこのお話の妃と姫の運命だったのです。そうして、このチャンス逃すべきかと、魔女は悲しみに暮れる王をあれよあれよという間にたぶらかし、王妃の死後から1年後遂に結婚に至ることができたのでした・・・。

結婚するにあたって、魔女は王に自分のすべてを打ち明けました。王は魔女が「魔女」であると知っても、婚約を破棄することはなりませんでした。なぜなら王もまた、真面目で心やさしい魔女に惹かれていたのです。こうして二人は幸せに暮らしたとさ。

しかし、魔女は一つだけ、王に隠していたことがありました。それは・・・

『鏡よ鏡。教えてちょうだい。私が森に置いてきた7人の子供たちはどうしてる？』

魔女の部屋の鏡が怪しく光輝いた。魔女を映していた鏡はすらったとした金髪の少年を映す。

「ああ。愛しの魔女様、いやもう妃様ですね。お久しぶりです。忘れられたかと思いましたよ。」
少年はそういい、黒いオーラをまといながらニコっと魔女に笑いかけた。

「そんなに怒らなくてもいいじゃない、ミラー。ちょっと忙しくて・・・ね。」
へらっと笑ってみせるがそんなごまかしは通じないらしい。

「いーえ。貴方様の性格的にすっかり忘れてましたね。思ったことには一直線で進むんですが、それ以外をおろそかにする。全くもって魔女とは言い難い素直(バカ)な性格してますよねー。」

「ほ・・・ほめてる？」

「そんなわけあるかー！！！いいですか？あなたが王といちゃついてる間にこっちは大変なことになってるんですからね！！」

これを見てみろ、という声と同時に少年は消え、森の中に建つ大きな豪邸が鏡に映った。その後、ぱっと映像が代わり7人の子供たちが泣き、わめき、暴れ、部屋の中がぐちゃぐちゃになった様子が映った。リビングと思われるところに何か作ろうと思ったのか食べ物や食器、鍋などがころがっている。その横にはしわしわになった服も山のように積まれていた。

「これは・・・ひどいわね。」
さも人ごとのような感想をつぶやく。どうにかしなければと思う心はあるが、魔女は城を離れることはできない。
王には、子供がいることは言っていないのだから。

「どうするんですか？愛しの魔女様。」
再び鏡は少年の姿を映し、魔女に問いかけていた。

「うーん・・・そうねぇ。」
魔女は悩んでみたものの、いい案が思いつかず鏡に問題を丸投げすることに決めた。
『鏡よ鏡。教えてちょうだい。この子たちを育てるのに一番ふさわしい人はだぁれ？』

「まじかよー。そりゃないでしょうよ。全く・・・ちょっと待ってくださいね。」
頭を抱えながら、鏡の中に消えていった少年は数分後、また鏡の中に戻ってきた。

「お待たせしました。魔女様。きっとこの人なら大丈夫そう。」
『それは、異世界姫です。』

異世界姫の事情

「うわーん、ゆきちゃーん。たいよーくんがね、ボクのおもちゃとったー。」

「ちがうよー。ちょっと、かりただけだろ。」

パタパタと足音を立てながら、まだ幼い顔だちをした男の子たちが駆け寄ってきた。
あのね、あのね、と二人ともすごい勢いでがしっと足にしがみついてきた。私は膝を曲げ、二人と視線を合わせた。

「翔(かける)くん、太陽(たいよう)くんにかしてっていったの？」

「・・・いった。」
うそだーという声が横からあがる。

「太陽君。翔君は貸してほしいって言わなかった？」

「・・・いったけどー、いいよっていってないもん。それなのに、もってっちゃったんだもん。」

「そっかー。太陽君は優しい子だから、翔君に自分のおもちゃ貸して上げれるよね。翔君は強い子だから、いいよっていってくれるまで待てるよね。」

そう二人にいうと、二人の気はどうにか治まったらしい。
見ていると「貸してあげる。」「ありがと。」

とやりとりをして、また二人で遊びに行ってしまった。

「さすが、雪ちゃん。子供をあやすのが上手ねぇ。」
それを見ていたらしい、館長が声を掛けてきた。
「もう、ここにきて１０年になりますからね。」

私は１０年前に両親を事故で亡くし、この施設に預けられた。
施設は高校卒業まで面倒を見てくれるが、卒業すれば自立していかなければならないのである。
私は今年１８歳。あと１年でここを出ていかなければならない。

つまりは、この施設にいる子供の最年長ということで、いつのまにやらお母さん的な存在となっていたらしい。そのため小さな子供たちに頼られることも多いのである。

「雪ちゃんは家事全般も完ぺきだし、いつでもお嫁に行けるわね。」
館長が冗談交じりで話していた。それを少しさめた気持ちで聞いてしまった。

「お嫁にもらってくれる人がいませんねー。王子様もとうとう迎えに来てくれませんでしたし。」

「ふふ。雪ちゃんは昔から童話が大好きだったものねぇ。」

「いまは、大嫌いですけどね。」

館長には聞こえないよう、ぼそっと呟いた。

物語の終わりはいつも同じである。

『お姫様は王子様と幸せに暮らしましたとさ』

しかし、そんな努力もしないで得る幸せなんて現実にはないのである。

だれも、助けてくれない。迎えにも来てくれない。

自分でなんとかしなければ・・・

そう思い始め、料理掃除など自分でできることは自分でするようになったのである。

期待なんてしていない。

そんな時、二人が話している背後にある全身を写せるほど大きな鏡が、だれに気付かれることもなくチカッと光った。

『みーつけたっ♪』

童話の中へ

・・・一体ここはどこなんだろう。

今日もいつもと同じように、
施設の子供たちに本を読み聞かせ、寝かせてから自分も眠りに就いた。
そして目が覚めたら・・・森？

いやいや、それはないでしょ。まだ夢の中だよね。
そうは思っても、今自分の座っている土の冷たさやざらっとした感覚はリアルすぎる。
風の音、木々の匂い。どこかから聞こえる虫の声。
すべてが夢にしてはリアルすぎる。
（夢の中じゃ、感覚なんてないでしょ。じゃあ、これは現実？）

日の傾きからいったら、時刻は朝方だろう。しかし、木々が覆いかぶさって森の中は夜のように暗かった。しかも・・・寒い。寝る前は上下スウェットという女子としてあるまじき格好で寝ていたはずなのに、起きたら真っ白なワンピース1枚になっていた。

一体、何がどうなってるのよ。・・・怖い。
漠然とした恐怖におそわれている最中、耳はまた別の恐怖の音を拾っていた。

ザッザッザッ・・・

ガサガサ・・・・ガサガサ・・・・・
ザッザッザッ・・・・

その音はどんどん近付いてくる。
どうしよう。逃げるべきなのかな？でも動いたら見つかるし。

そう考えているうちに、その音は自分の背後まで迫っていた。
（まぁ、どうしようもないか）
変なとこで割りきれちゃうんだよね、私はいさぎよく、後ろを振り返った。
そこには・・・

「うぉ！びびった。いきなり振り返るなよな！！」
・・・ちょっとビビりな狩人さん（仮）がいました。
（格好が狩人っぽいし、銃持ってるし・・・とりあえず仮！）と心の中で命名する私であった。

「えっと・・・ごめんなさい？」
とりあえず、謝ってみる。とりあえず、よくわかんないから怒らせるとまずいし。

疑問形かよー、とがっくりと肩をおとす狩人さん（仮）は、よくみると整った顔立ちをしている。
２０代後半くらいに見えるその体型はいかにも、訓練している様子がうかがえる。
目の色はブルー。髪の毛は黄金色。
どうやら、ここは海外のようだ。うん、そうだ。
うんうん、と頷く私を見て狩人さん（仮）は不審そうな眼を向けてきたが、
そんなことは気にしない。とりあえず、人が見つかって（正確には見つけられた）よかったよー。

「とりあえず、見つかってよかった。」
ん？それは私のセリフでは？と不思議に思い、ほったらかしにしておいた狩人さんに目を向けた。

「どういうこと、ですか？」

「言葉どおりの意味だ。あんたを探してたんだ。雪のように白い肌、血のように真っ赤な唇、闇夜のように真っ黒な心をもつ子育てができそうな『異世界姫』を。」

「ん？あれ？ちょっ・・・最後おかしくないですか？」
なんか聞き覚えのあるセリフ。だけど、違うよ。
私が何度も読んだ絵本にあるセリフはこうだ。

『雪のように白い肌、血のように真っ赤な唇、黒檀（こくたん）のように黒い髪をもつ』

「あーよかった。見つからなかったら、ま・・いやお妃さまにどやされるとこだった。」
わたしのセリフを見事にスルーしやがった。
っていうかこれ、白雪姫？なの？？
じゃあ、この狩人（仮）さんて、私を殺しにきたんだ。

「狩人（仮）さん！お願い殺さないで。」
確か、このセリフでよかったはずだ。
これで、殺されずに私は小人の家に逃げ込むのだ。

「はぁ？何言ってんだ？お前。殺すわけないだろ。せっかく連れてきたんだから。」

「えっどういうことですか？お妃さまに余りに私が綺麗だから殺せって言われてきたんじゃ・・・？それで心臓だか肝臓だかをもってくるように言われてるんじゃ？？」

「はぁぁぁ！？おまっよくそんなグロいこと言えんな！ってかどの顔見てそんなことほざくんだ。」
さすがにカチンときた。右も左もわからない乙女に対してその態度？もういいかな？本性だして。これは夢なんだから・・・

「はぁ？こっちの童話ではそうつたわってるんだからしょうがないでしょ！！じゃあ狩人（仮）何しに来たのよ？」

「お前を迎えに来たんだよ。」
そういって狩人（仮）はニヤリと笑った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9203s/

異世界姫と七人の小人

2011年10月8日18時25分発行